



岩手県大船渡市にて 考えたこと

— 個人的避難所訪問記 —

日高医師会

日高町立門別国民健康保険病院

谷井 広 樹

被災地訪問は「お姉さんと連絡がつかないんだ」という父の言葉で始まりました。幸い連絡がついた後、避難所全体での医療の必要性を知り、好意で動いてくれた姉とその気になった私と、行政関係者のご協力のもと、4泊5日の大船渡市での避難所滞在が始まりました。

フェリーから続々と帰道する消防関係の車両に力づけられ、被災15日目、寒さを象徴する雪の秋田に到達しました。他の（立派な！）医療チームを拝見しつつ、災害援助活動初体験、たった一人の援助活動を開始しました。避難所では公民館長をはじめ、住民や行政の方に良くしていただき、体育館の一角（着替え・オムツ交換所兼）に「谷井医院」（館長さん命名）を始めさせていただきました。初日は、皆さんの生活状態を知りたく、ゴザの上に毛布1枚で寝させていただきましたが、深夜に寒さによる震えと、皆さんの絶えることのない咳嗽に眠られない状態でした。また、おにぎり、カップラーメン、漬物、缶詰等、炭水化物と塩分に偏りやすい食事ですっかりむくんでしまいました。

プライバシーのない生活でしたが、それぞれが役割を見いだすように努めておられ、思った以上に「自然体」の生活があったようにも思います。ただ、介護を要する方への対応は困難を極め、軽度認知症の女性で肺炎と早期診断できたのはよかったのですが、その後、仕事に行かなければならない息子さんに大変な負担がかかり、医療援助としての立場の限界を感じ、避難所においても早期のケアマネジメントが再開できればと思いました。

開業医の皆さんは、医師会長さん自身が死亡される状態で、被災後1週間後に投薬再開、2週間後くらいには検査も再開されていました。供給量に制限がある中での薬品の確保や個々の医師による避難所の巡回医療活動等、大変な状況にあることが、地域におけるたった1回の連絡会に参加させていただくだけでも教えていただきました。

避難所では30名くらいの方の診察をさせていただきましたが、援助者の基本を逸脱し、皆さんに勧められるまま、寝食をともにさせていただきました。最後に、「居てもらって安心できた」という、感謝というお土産もいただき、私の医療援助活動は終わりました。



避難所生活：大船渡市立大船渡北小学校体育館

約200名の滞在。市内で3番目に大きい避難所。特に運営がしっかりされている



避難所での医療活動

住民代表の方が、特製の看板を作ってくださいました



避難所内診療コーナー光景